

## 魔女と王様

とつても小さな九つの国——3

あわなみりようさく

### 51 ローズンの時間、ニーダマの時間

西リಂಗリングの森の南のはずれに、海を望むこじんまりした可愛らしいコテージがありました。青く晴れ渡った空に不似合いの黒い雲が、コテージの前に舞い降りました。そう、リングリングのおばさまケーリアと、ローズンです。

「まあ、可愛らしい家！ ケーリア、ここは？」

ローズンが白い壁に手をあて、ゆつくりとコテージの周りを歩きます。

「ここは、『はぐくみの家』さ。今のあんたみたいにちよつと心がぐらついている魔女にはもってこいの場所……」

「心が、ぐらついている？」

ローズンが首をかしげます。

「そうだよ。愛しい人が姿を消してしまつて、あんたの心はぐらついている」

「ううん、ぐらついてなんかいないわ」

「ほんとうなら時間を自由につかさどることのできるあんたが、おかしいとは思わないかい？」

「え？」

「な、そうだろう。あんた、自分がどの時間の中で生きてるのか、わからなくなつてるじゃないか」

「そう……かしら……」

「そう、さ。そんなときはね、こんな場所でゆつくりするのがいちばん。生まれてくる赤ん坊のためにも、あんた自身のためにもね」

「う、ん」

ローズンは人さし指を立てて白い壁をすつとこすり、ざらつとした感触を確かめていました。それは、ぼやつと霧のかかった心の奥にある何かを探しているようでもあり、時間の感覚を取り戻そうとしているようでもありました。

「ここならね、よけいな邪魔は何も入らない。気の良い魔女たちもいる。あんたは赤ん坊のことだけを考えて、しばらくはゆつくり過ごすがいいさ」

「でも、あの人が戻って来るの……」

ローズンが力なく言いました。

「ローズン……」

ケーリアが言います。

「もう、その人は戻ってこないんじゃないかって、あたしは思うね」

「そんな！」

ローズンは涙を流さんばかりです。

「あんた、その人の時間の流れをどのくらい変えてしまったか、わかってるかいかい？」

「え……」

ローズンは初めてそのことに気がついたのです。思い出そうとしても、思い出せません。いいえ、ローズンは何にもしていません。ニーダマの時間の流れを変えようなんて、考えてもいなかったことでした。でも、恋をした魔女は、その魔力を強めるもの。そして、ときにその魔力は、自分で思ってもみない方向へと発揮されるものなのです。

「ケーリア、わたし……」

ケーリアは小さくうなずきました。

「わたし、何をしてしまったのかしら……」

もしかしたらもう、あの人は年老いて死んでしまったかもしれない。それとも、子供に戻ってしまったかもしれない。それとも――。

いくら考えても、ローズン自身にはわからないことでした。ローズンはケーリアの胸に顔をうずめ、声押し殺して長い長い間、泣き続けたのです。

その頃、ニーダマは三百の騎兵を引き連れ、今しもデッキデッキのとなり山麓にさしかかろうとしていました。

〈 つづく 〉